

# 誕生日に母を語る



誕生日は年に一度自分を産んでくれた「お母さん」を思う日…。

## いつも私の中にある「母」

小嶋智恵子 (35歳/横浜)

人生35年を振り返ると、いつもそこには母の大きな自由がありました。

私の「絵を仕事にしたい」という夢のきっかけになったのは、25歳がスタートです。

5年間会社勤めをし、コツコツ貯めたお金で、イギリスへ留学しました。あのとき、「留学なんてやめておきなさい」と言われていたら、今の私は

いません。周りが結婚していく中、自分の育てた娘としては、「このまま普通に結婚すればいいのに」とは思っていたようですが。

ありのままにいられること。それがどんなにありがたいことか。ありのままに振る舞え

たこと、それを大きな自由で許してくれていたこと。感謝です。

母はとても人間くさい人でした。私など、もつと割り切れられない人聞らじさがあり、結局人の裏方に回っていた、いつも損ばかりしていたように思います。

そんな母を「どうして」とか「かつこ悪い」と思っていた時期もありました。しかし、今は母の人生の美学だったのだと思っています。そして、損をしているように見えた出来事も、実は、そこには母の相手への情けがあり、それが人間として必要な「徳」の精神であったのだと知りました。

私はそういう意味では、人生の前半をそういう母の姿を見ていろいろ学ぶものが多かったように思います。そんな母がつくってくれた料理を食べ、洗ってくれた洋服を着て、育った私の中に母の一部がいます。私が描く絵にもきつと、母がどこかにいるはずなんです。

そんな自分と、今、子どもを育てている私。いつか娘の中にも私が残るのかしら。ふとそんな風に考えたりします。お母さん、ありがとう。

# 子どもを叱るとき 追い込んではいませんか？

text: 木村 乃  
ビスデザイン株式会社 dk@biz-design.co.jp

正しい指摘はときに人を傷つけてしまう。あまりに相手が正当だと、こちらは何も言わず自動的に思考停止に追い込まれてしまうというのはよくあること。

親が子を叱るとき、説教をたれるとき。子どもを逃げ道のない袋小路に追い込んではいないだろうか。

吉野弘という詩人(1926年生。山形県酒田市出身)の「祝婚歌」という作品がある。「正しいことを言うときは 少しひかえめにするほうがいい 正しいことを言うときは 相手を傷つけやすいものだと 気付いているほうがいい」。

親がよく口にする台詞がある。「なんでそんなことするの!」。国語的にはもちろん修辭疑問文なのであって、その理由を聞いていないわけではない。でも、子どもは問い詰められていると感じる。答えなんか最初からない。「つい」やっちゃった。それだけだ。だから黙り込む。「なんで黙ってんの!」。ますます黙り込む。もう逃げ場はない。みんな子どもだったんだから、わかるよね。お父さん。

# オババの育児日記

## 布オムツに挑戦!

2人目の孫・斗聖(とうま)が生まれて以来、再び赤ちゃんがいる喜びを味わっているオババである。実は今、お母さん大学の学生たちがウェブ上で交流するSNS「夢ひろば」の中に、布オムツの子育てが楽しいというお母さんたちが集うコミュニティがあり、私も参加している。そこで「(学長代理の孫の)とうまくにも布オムツをおすすめしよう!」という企画が持ち上がっている。娘にそう言うと、「えっ、布オムツ!?ありえない!」と冷めた反応だった。

布オムツがいいことなのはある程度わかっているが、4歳と生後3か月の男の子2人を抱えるママにとっては、毎日が戦争。最近やっと、夜中の授乳ペースが落ち着いてきて、だいぶ眠れるようになったばかり。それを今さら、何を好き好んで布オムツにするだなんて! 経済より環境より、とにかく睡眠、が本音?…というか、たぶん娘には、今まで全く「布オムツ」という選択肢はなかったに違いない(親の教育が悪い。誰だ!?)。

が、お母さん大学生の私としては、「布オムツにすると、子育てが楽しくなるのはなぜか」が、知りたかった。百聞は一見に如かず、いや、百聞は一行に如かずと布オムツを購入。斗聖のかわいいおしりにつけた。ふわっと、人間の肌に当たる感覚は誰だってわかる。斗聖のおしりが喜んで!

その夜、私は布オムツを洗いながら「オババは、川(お風呂)でオムツをざぶざぶと洗いました…」と独り言。翌日、編集部のベランダにズラリと並んだ布オムツたちが、朝陽を浴びて踊っていた。それに合わせるかのように、オババの心もルンルン。オババのオムツ遊びは楽しいが、忙しいお母さんたちにとっては、布オムツの喜びを実感するに至るまでの道は、遠く険しい?

アフリカ諸国など、いまだにオムツをしない国もあるが、日本では「オムツはずし」の本が出ていほど。経済の豊かさの一方、五感の文化が乏しくなりつつあることも否定できない。

さて、斗聖と布オムツ物語の続きはどうなるのやら。娘にもやがて、布オムツの子育てを楽しみと思える日は来るのだろうか。その日、「トランタンにいるときだけ、布オムツにしようかな?」と言い残して帰った娘。それは確かに「楽」かもしれないけど…。(藤本オババ)



食を支えるお母さん

おいしくて安心なお惣菜でカラダもココロも元気に

渡辺陽子さん(名古屋市・49歳)

愛知県にある無添加の手づくりお惣菜の会社「クッチーナマンマ」さん。イタリア語で「台所のお母さん」という意味です。愛情細やかな家庭の味、おいしくて安心なお惣菜を食べて、ココロとカラダの健康づくりに貢献したいと願ってつけられた社名です。

クッチーナマンマでは、①生産者や栽培方法の確認がとれた国産野菜、豆類、雑穀、乾物、海藻などを使うこと。②保存料、合成着色料、化学調味料など、家庭の台所に無いものは使わないこと。③油脂類の使用は、最小限に抑えること。の3つに徹底的にこだわっています。

社長の渡辺陽子さんは3人の男の子のお母さんですが、お料理好きが高じて、子育てと仕事を両立しています。常時100種類くらいのお惣菜がありますが、和惣菜から洋食、マクロビオティックのお惣菜まで、幅広いレパートリーが評判です。人気商品の一つが、お母さん大学in多治見のランチ交流会でも評判だった「有機のやさしい塾弁当」(写真)。牛乳、卵、肉を使用せず、ローカロリー、無添加、野菜中心のお弁当なので、高齢者から子どもまで、幅広い世代に受け入れられています。



有機のやさしい塾弁当

取材協力●にんじん CLUB <http://www.ninjinclub.co.jp/>

●池川クリニック 横浜市金沢区大道2-5-13 TEL045-786-1122

# 胎児のストレスを解消するために

池川明の胎内記憶 [www.1seapple.icc.ne.jp/akegawa](http://www.1seapple.icc.ne.jp/akegawa)



池川クリニック院長 池川 明

■帝京大学医学部大学院卒。医学博士。1989年横浜市に、産婦人科・池川クリニックを開業。「胎内記憶」の研究発表がマスコミで紹介され話題に。著書やDVD多数。

先日雑誌の取材で吸引分娩の話になりました。著書にも書いたエピソードですが、赤ちゃんの許可なく吸引した場合、赤ちゃんはすごく怒り、ちゃんと許可をもらおうと「助けてくれてありがとう」と言うという話です。実は、記者の息子さん、今は成長し忘れてしまったようですが、小さい頃、「産まれるときに頭を引っ張られて痛かった」「誰もぼくの気持ちを聞いてくれなかった」と言っていたのです。なかなか生まれにくい状況の中、先生は時計を見ては「イライラ。点滴で促進され、馬乗りになってお腹を押し、それでも赤ちゃんが生まれず、吸引分娩をしたそうです。息子さんは、医師を「おじいさん」と表現し、もう一人「おばあさん」がいたと言ったそうですが、年配の助産師さんだったので、きつとその方だろうと。とにかく、かなりしつかりと誕生の記憶を持っていったようです。

私は自分の経験から、産科処置をするときには、ちゃんと赤ちゃんに許可をもらわなければならない、と考えています。もちろん赤ちゃんが「嫌だ」と言っても処置をしなければならぬ場合はあります。ただ、どんな人も、嫌なことをされるときに、自分はそれが嫌だ、と言うことを知っていてその気持ち尊重された上でされる場合と、そんなことにはお構いなしにされる場合では、嫌さ加減が違うことは理解できるでしょう。もし赤ちゃんが望まないことを大人がするにしても、嫌がっているんだとわかっているということ、赤ちゃんに伝えてから行うべきではないでしょうか。

先日、引きこもりの会が主催する講演会に招かれました。そこで驚いたのは、私が「胎内記憶」を通して伝えている、親子が妊娠時期から関わることの重要性について、同じ結論に達していることでした。心理的障害が現代文明の大問題となっており、教育、犯罪、介護、医療に深刻な影響を及ぼしていることは周知の事実(山崎正和氏/読売新聞21年1月12日)。そして、その心的な障害が、実は胎内から起こっているという点も、そろそろ世界の常識になるうとしていきます。いかに出産時期の母親の気持ちが大切か、胎児の気持ちを大事にするのが問われる時代に入りつつあるのです。妊婦健診の補助が4月からほぼ全国で14回出ることにになりました。同様に、妊娠中の母親のストレスを緩和するため、助産師や臨床心理士、妊娠に関わるセラピストなどによる、出産前後のお母さんの傾聴を中心とするケアサービスを、補助システムで提供してはどうでしょう。そうならば、ストレスから起こる出産時の異常も減り、さらに育児不安、その後の子どもの精神・健康状態が良くなるはずなんです。そんな仕組みをつくるように、市民から国に要求してもいいのではないのでしょうか。